ルーツ探究の旅

『神和三島誌』の記述がきっかけで、矢野家のルーツをたずねてみようということになった。私と竹内先生だけではどうしようもないので、叔母にも参加してもらうことにした。

高浜から中島町営汽船に乗る。まず、中島の大浦港で下船し、粟井の教円寺を訪れた。教円寺は、祖父倉市の妻（私からいえば祖母）の出さとである。叔母は、ここを訪れるのは五十年ぶりだと言う。現住職の山田一裕氏夫妻にいろいろとお話をうかがうことができた。山田家は、十六代前まで遡ることができ、開祖は元今川家の家臣山田式部太夫教義というのだそうだ。

粟井をあとにし、西中港から上怒和に向かった。『神和三島誌』によれば、上怒和には「株内」と称する組織があり、そのうち矢野ほか七家から成る「中株」は、若宮社を守護神として祀り、毎年旧暦八月十七日には幟を立て社に参拝し、そのあと賄いをして懇親する、とある。まずこの社を見に行った。小高い山の中腹に、小さな祠（ほこら）がひっそりと鎮座していた。

つぎに墓を見に行く。かなり山を分け入ったところに矢野家先祖の墓は苔むしていた。墓碑銘も摩滅しているが、「嘉永」や「天保」の文字が読み取れる。もっと古そうな墓もあったから、少なくとも江戸時代中期以前には遡りそうだ。私も小さい時、夏休みなどにこの島を訪れたことが何度もあるが、若宮や先祖の墓はついぞ訪れたことはなかったように思う。

山から降りて来た時、偶然「中株」の一員たる天満俊雄さんにお会いした。天満さんは、若宮は矢野家の先祖八郎四郎を祀っていること、旧暦八月十七日の行事は今もって続けていることなどを語った。

矢野家には、先祖の八郎四郎は平家の落人なりという言い伝えがある。ところで、宮本常一『瀬戸内海の研究』には、上怒和の支配者として名主八郎左衛門なる名が出てくる。宮本のいう八郎左衛門と伝承の八郎四郎はいかなる関係にあるのか、改めてじっくりと調べてみたいという思いに駆られた。